法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-29

<追悼文>旗手を失って

高良，倉吉

(出版者 / Publisher)
法政大学沖縄文化研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
琉球の方言
(巻 / Volume)
18-19
(開始ページ / Start Page)
26
(終了ページ / End Page)
27
(発行年 / Year)
1995-02-24

Hosei University Repository

旗手を失って

高良倉吉

専門分野が違い、それに居住地が異なっていたこともあって、中本正智氏とは生前親しくお付き合いする機会に恵まれなかった。比嘉実氏の紹介で中本氏の大著『図説琉球語辞典』の書評を『南島史学』第19号（1982年）に書いた時が、いうなれば出会いの始めである。面識のなかった私に対し、中本氏は比嘉氏を介して書評をお願いしてきたという訳である。その頃私は住宅を新築中であり、狭い仮住居の部屋で中本氏の大著に向き合い、その中からスカマという言葉を自分の研究に引きつけ、なんとか原稿をまとめたことを覚えている。後で知ったことだが、中本氏は私のために南島史学会への入会手続きをとり、会費まで払ってくれたらしい。『南島史学』は会員以外の投稿ができないための措置であった。それ以来、中本氏の友情に感謝するため南島史学会の会員を続けている。

それが縁で、今度は『琉球語彙史の研究』の紹介を沖縄の新聞に書く機会を与えられた。専門外の私が執筆を受けたのは、琉球語の態様に歴史的変化のメスを入れ、歴史研究との接点を提示し続ける中本氏に対しエールをおくりたかったからにほかならない。

1987年１月、職場の同僚である糸数兼治氏と２人で東京大学法学部に原文照合のため出張した際、法政大学沖縄文化研究所を訪れた。比嘉実氏の手配があって、中本氏を加えた四人で酒を飲む機会を持った。その時、私は初めて中本正智氏に直接会う機会を得たのであるが、まさか、その席が唯一にして最後の機会だとは想像もしなかった。

あの夜のことを思い出す。その頃私が『琉球王国の構造』をまとめている最中だったことも手伝って、中本氏に矢継ぎ早に質問した。「首里語」の概念についてどう思うか、「首里語」は自然形成的なものではなく政治行政的な基盤において形成された言葉と見てよいかどうか、など素人の質問に対し、中本氏は困ったような顔をしながらも誠実に応えてくれた。

中本氏は「おもろ仮名遣の源流」（『琉球の歴史と文化』所収、1985年）と題する興味深い論文を発表しており、その論旨に我が意を得たりと思っていたので、あのように素朴な質問を投げかけることになったのだろう。

琉球語が各島で急速に失われているこの時期に、徹底的な記録、収集活動が急務であることは論をまたない。そして、得られた膨大なデータを丁寧に解析して、琉球語の実態に関する実証的な研究がこつこつと書かれるべきこともよく承知している。また、琉球弧の言語特性を周辺世界との比較において明らかにする仕事も肝要だと思う。それらの偉大な仕事に連動しつつ、この言語が辿ってきた歴史的変遷を究明する仕事もまた必要だと感ずる１人で

Hosei University Repository

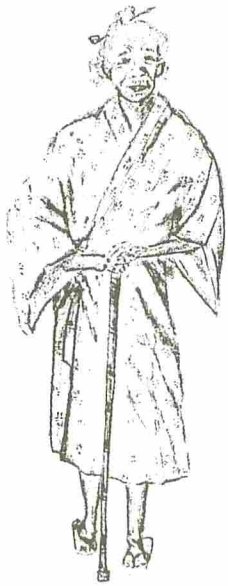
あったから、この面でも旗手であった中本氏に関心があった。

琉球王国論の派手な主張者と見られている私だが、解決すべき論点を山ほどもかかえている。中本氏が見通しをつけた「おもろ仮名遣」とは、どういう経緯で、いかなる基盤を持って成立したものなのか。『おもろさうし』だけでなく、碑文や辞令書、墓室内の石棺銘書など広汎な記載面に記されたこの言葉の文化的背景とは一体何か。そしてまた、その記述様式は政治行政の問題にどう絡むのか。——この疑問も検討したい点の１つである。

様々お習いしたかった当の中本氏が、先に逝ってしまったことをつくづく嘆いている。

残念でならない。

（琉球大学助教授）



オバー（おばあさん）　カット・中本正智